

研究会
たより

第7回

全国大会のいよ

萩谷昌己(東京大学／調査研究運営委員会委員長)

FIT(情報科学技術フォーラム)については以前に述べた。来年から秋の全国大会が電子情報通信学会のISS(情報・システムソサイエティ)と合同で行われることになり、それをFITという。第1回は東工大で行われる。FITの各種委員会は随分と気合いを入れて、第1回の大会に向けて準備を進めている。FITについては次回に詳しく書く。

その一方で、林副会長は春の大会をどうしようかと、随分と頭を悩ませておられた。ようやく組織委員会の方でその方向性が定まり、理事会でも承認されたところである。簡単にいうとFITは研究会を中心とした学術的な方向を主流とし、春の方は「広く社会全体に対する情報発進の場として産・官との連携を重視するなどの特色を持たせた大会とする。研究会のかかわりとしてはプログラム委員会に各領域から1名が参加する(他に会誌編集委員会から数名)」ということになった。研究会の力はFITに注いでもらうこととし、春の方は研究会がまったくかかわらないわけにもいかないので、領域全体を代表して1人ずつだけプログラム委員会に出いただく、ということである。以上、事務連絡のようになってしまった。

さて、研究会と全国大会の関係は因縁が深い。たとえば、全国大会のプログラム編成、すなわち、セッション分け、座長の選定などに、各研究会から1人ずつプログラム編成委員として出ている。全研究会の代表が一同に集まって、ワイワイガヤガヤとプログラム編成をするという光景が年に2度あり、学会の風物詩のようになっている。これは1日で済んでしまうこともあり、各研究会の知恵を少しだけ貸していただく、という感じで各研究会の反応は悪くない。

しかし、各領域から全国大会にプログラム委員を出すという規則については、研究会の評判が相当に悪くて、自分のところの研究発表会やシンポジウムで手一杯なのに、何で全国大会なんかに貢献しななければならないんだよ、ということになる。もちろん、全国大会に積極的に企画を提案していただいた研究会も多かったのであるが。

ともかく、研究会にもよるが、全国大会は研究会

の活動にとって何の関係もないところが多い。国際会議も勝手にやるし論文誌も発行しているような研究会が、何でいまさら全国大会なの、という感じである。FITの方は、ぜひぜひ、そんなことを言わずに、研究会に活躍していただきたい、ということである。

全国大会の位置付けは非常に難しくなっている。よく聞くのは、学生の発表が多すぎるということである。つまり、教育の場になってしまっているということである。逆に、新しい研究の発表を初めて行う場として全国大会を利用することは稀になった。ということは、全国大会に行っても新しい話を聞けないので、参加者もますます少なくなる、という悪循環である。昔は、全国大会に行けば情報処理の最新の技術の動向がすべてつかめる、とよく言われた。いまでも情報処理の分野の方向性が大体分かることは確かだが、最先端の技術が拾えるかということ、どうかな?という感じである。

以下はまったくの個人的な考えであるが、全国大会に何らかのメリットを期待すること自体、間違っているような気がするのである。全国大会というのは一種のお祭りで、学会というコミュニティへの帰属意識の現れと捉える

べきではないだろうか。非常に専門的な小学会ならば、学術的なメリットがあって大会に参加するものなのだろうが、情報処理のような大学学会の場合、情報処理という分野に属する研究者・技術者・教育者などにとって、全国大会に参加することが、その分野に帰属する証(あかし)の1つになるべき、ということである。

面白いパネルがあるからとか、ためになるチュートリアルがあるからとか、そういう目先のことを工夫しても駄目だと思う。全国大会が盛り上がらないのは、学会への帰属意識が低いからである。つまり、学会全体の問題なのである。そして、今度のFITが成功するかどうかは、情報技術(IT)というより大きな分野への帰属意識が確立しているか、確立できるのか、にかかっていると思う。(はぎゃ)

(平成13年12月14日受付)

